

中国領アルタイの古儀式派：国連難民高等弁務官事務所資料を中心に

塚田 力（北海道大学文学研究科博士後期課程）

はじめに

本稿で中国領アルタイと呼んでいるのは、現在の中華人民共和国の新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州アルタイ地区である。アルタイ山脈の南麓に当たり、ロシア連邦のアルタイ共和国、カザフスタンの東カザフスタン州、モンゴル国の西部諸県と隣接する。南部のジュンガル盆地には砂漠が広がるが、北部では農耕や遊牧が可能である。新中国成立後、漢族や回族も入植も見られるがなお人口の過半は原住少数民族からなる。

本稿ではこの地域のロシア系住民、特に彼らの過半を占めた古儀式派の移住史を概観したい。

ロシア系住民の移住

1755 年、この地域を支配していたジュンガル部は清朝に征服され、以後この地域は清朝に編入され、ロシア帝国と国境を接することとなった。

一方、現在のロシア連邦アルタイ地方とアルタイ共和国カザフスタン共和国北東部に「石の民（каменщики）」と「ポーランドの民（поляки）」とよばれる古儀式派の人々が現れた。

「石の民」は 18 世紀前半頃から現れ、宗教的迫害や兵役などから自由意志で逃れてきた。彼らはウバ川、ウリバ川の上流と、ブフタルマ川、ベラヤ川流域に隠れ住んだ。1791 年、彼らはヤサクを納める異教徒としてロシア帝国の構成員となった。

一方、「ポーランドの民」は 1760 年代以降に元老院の勅令によってポーランドのヴェトカ（現在はベラルーシ共和国領）から強制的に移住させられた人びとである。ヴェトカには迫害を逃れ多くの古儀式派が移住していたが、エカテリーナ 2 世時代に強制的に国内に連れ戻されシベリアに移住させられたのである。彼らは農業のみならず森林伐採やロシア帝国での工場での労働、鉱山採掘の義務も負っていた。¹

この両者が中国領アルタイの古儀式派のおもな源流となったと思われる。

中村喜一氏の著作でよく知られているように、18 世紀にはシベリアの古儀式派の間で「日本国白水郷」というユートピアのうわさが広まった。彼らの一部は日本を目指して、または豊かな土地を目指し、政府の干渉を嫌って出国していった。流布していた白水郷への道は、ブフタルマ川源流域を経るものであり、中国領アルタイ地区北部を経るものである。

1827 年にはハナス湖から清朝官憲に追放された集団があり、1860 年にはロプ・ノールに移住しようとして失敗した一団の悲惨な運命が知られている。²

しかし、定住に成功したグループもあった。³

民間伝承によると、1830 年頃に彼らは使者を送り、カザフ族のタイジ（清朝の爵位のひとつ）カラウスマンに酒、貂の毛皮、金貨などの贈り物をし、ピョートル大帝による迫害について語り、中国に避難させてくれるように依頼した。カラウスマンはこれを許し、500 余人をアルタイ地区のブルチン県のホンムーとチョンフルに割り当てて、以下のような簡単な取り決めをした。

- ・ 居住区を決めた後は、勝手に移動しない。

¹ 『東シベリアの歴史と文化』、228-231 頁。

² 『聖なるロシアを求めて [増補版] 』、144-165 頁。

³ 『俄羅斯族簡史』、11 頁。

- ・ 毎年一度、ホブド参贊大臣に納税する。
- ・ 放牧、耕作、狩猟、養蜂などの正業につく。

彼らの人口は、次第に増加したので、さらにハナスとハイリュウタンの2ヶ所の居住区を開いた。また、少数の者は伊犁と塔城の山地へ移住した。

彼らの居住区はみな山奥にあり、農業または牧畜業に従事していた。養蜂、漁業、狩猟は彼らの重要な副業だった。大麦とうまごやしを植え、牛、馬、羊を飼い、養蜂を行い、テンを捕り、松の実を集めていた。彼らの勤勉さと、町から大変離れていて、官吏に干渉されることが大変少なく、税金も、労役も無かったため生活は比較的豊かだった。⁴

このような形での移住は、現在のトゥバ共和国でも行われていたとされる。

彼らの入植した地域では、遊牧生活を送るカザフ族とモンゴル族（ソ連式の民族区分に従うとトゥバ族）が住民の大多数を占めている。現在でも、彼らの残したログハウスが利用されている。

その後、1911年には承化寺（現在のアルタイ市）にロシア領事館が建設された。

1912年からアルタイ地区は漢族の軍閥の支配下に入る。1912年から1917年にかけてロシア軍が承化寺（現アルタイ市）ハバフ、ブルチンなどに進駐した。ロシアがブルチンに埠頭を建設し、イルトゥイシ河にザイサン湖までの貨物船航路を開設するなどした。このころ、ロシア人農民300余戸がチョンフル等に入植した。⁵

1930年頃にはソビエトでの農業集団化の影響により、古儀式派だけではなく移住者が増加している。

1933年には甘粛省から回族の軍閥馬仲英の部下馬赫英が承化（現アルタイ市）を占領。漢族、モンゴル族、ロシア族殲滅を目指して虐殺を行った。夏にかけて、ロシア族農民が組織した自衛隊が、ウルムチから派遣されたアルタイ宣撫使ボルハンと協力しつつ馬赫英部隊と戦闘した。⁶現在キルギスタンに住む古儀式派教徒のΦ. ゴシコデリヤの回想によれば、古儀式派も多数が虐殺され、自衛隊には古儀式派も参加し戦闘に加わった。面識のあるイスラム系の住民から、彼らは襲撃予定を知らされて事前に逃亡するなどしていた。⁷

ブルチン県とハバフ県に合わせて295戸、1200余人の古儀式派がいたとされる。⁸翌年の新疆省警務所（警察）の統計ではこのブルチン県とハバフ県には合わせて1935人のロシア系住民がいたとされる。⁹アルタイ地区のロシア族の過半は古儀式派であったと考えられる。現在でも、トルコ系の人々はアルタイに住むロシア系住民をキルジャークと呼ぶ。キルジャークとはケルジェネッツから移住してきた容僧派の古儀式派教徒たちを指す言葉であるが、アルタイではロシアを指す言葉となっている。

1945年にはアルタイ地区は東トルキスタン共和国の支配下に入るが、1947年カザフ族アタマンのウスマンはウルムチの国民党政府の支援を受け東トルキスタン共和国の軍事勢力と衝突した。

1949年にこの地区は中華人民共和国の支配下に入るが、ウスマンによる反乱等が続きその後も戦闘行為は断続的に継続し、50年代前半まで情勢は不安定だった。その後、徐々に人民合作社の結成や人民公社化などの社会主義改造を嫌って、また出国の機会が増えたため、彼らの移住が盛んになった。

その後、国連難民高等弁務官事務所の援助やソ連からの招請を受け、彼らの大半は1960年ごろまでに世界各地へと出国していった。香港を経てアメリカ、カナダ、オーストラリア、ブラジル、ボリビア、アルゼンチンに向

⁴ 『俄羅斯族簡史』、11頁。

⁵ 『新疆五十年 包爾漢回憶錄』、33頁。彼らには古儀式派以外も含まれる。

⁶ 『新疆五十年 包爾漢回憶錄』、200頁

⁷ Ф. ГОШКОДЕРЯ. ИСТОРИЯ РОССИИ И СУДЬБЫ ХРИСТИАН. ЧАСТЬ ПЕРВАЯ
http://www.miass.ru/news/ostrov_vary/index.php?id=7&text=86

⁸ 『俄羅斯族簡史』12頁。

⁹ 『新疆民族辞典』 877頁。

かった者たちと、ソ連各地に帰還した者がいた。特にフルシチョフが処女地開墾運動のために積極的に帰還を促した。

現在、彼らはアメリカのオレゴン州、アラスカ州、カナダ、ブラジル、ボリビアなどに居住している。

筆者が調査したところ、アルタイ地区の古儀式派はほぼ皆無である。ごく少数がオレゴン州から伊寧などに帰還している。

国連難民高等弁務官事務所とは

1951年の「難民の地位に関する条約」において、難民は、「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れた」人々と定義されている。

20世紀初頭、第一次世界大戦やロシア革命などで、多くの人々が故郷を追われた。こうした事態に対処するため、1921年、北極探検で有名なノルウェーのフリチョフ・ナンセンが国際連盟から初の「難民高等弁務官」に任命され、難民の保護や援助に活躍した。その後いくつかの変遷を経て、1951年に設立されたのが、国連難民高等弁務官(以下 UNHCR)事務所である。UNHCR は、人道的な立場から、国籍国の保護を失った難民に「国際的な保護」を与え、同時に食料・医療・住居などの援助を行うこと、そして難民問題の解決をはかることを任務としている。¹⁰旧ソ連および隣接地域でも彼らは活動しており、難民全般に関する多くの資料が現在も作成・保管され続けている。

UNHCR は 1951 年ごろから香港でも活動し、中国からの難民を保護してきた。香港の難民の大半は漢民族であった。欧州人、特にロシア系の住民も中国各地から難民として香港へ到来した。UNHCR は世界教会評議会 (World Council of Churches)、欧州移住政府間委員会 (Intergovernmental Committee for European Migration)、トルストイ財団 (Tolstoy Foundation) 等の諸団体と協力することが多く、彼らの香港での保護と、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ブラジル、ボリビア、アルゼンチン、フィリピン、タイ等の諸国への移住、さらに移住先からの最移住をビザの発給なども含めて支援した。

UNHCR は移住先での定住支援、再移住の斡旋なども行っている。

チベットを経由した集団

中国の新疆省からやってきたキプリコン・チャーノフらのグループの運命は、人間の忍耐力と不屈の意志に関する驚くべき物語である。「ソビエトの楽園」から立ち去るべく旅をはじめた当初、彼らは約 400 名から成っていた。しかし、ヒマラヤ山脈、ゴビ砂漠、チベットを経て、インドのカルカッタでトルストイ財団が彼らの援助の要請を受けた時点で、彼らの人数は 24 名にまで減少していた。

彼らのニュースはヨーロッパやアメリカの報道で大きく取り上げられた。ヒマラヤを越える際に彼らを個人的に援助していたアメリカの副領事が命を落とした。彼らは、彼らが「世界の天井」たるアルタイ山脈で闘ってきたところの、ロシアと中国の共産主義者たちをはっきりした敵だと認識している。

彼らはジュネーブとブレーメンを経由し、1952 年にアメリカに到達した。ブレーメンでのアメリカへの最終的な出国手続き中に、さらに一名が担架の上で亡くなった。彼らはニューヨーク州ロックランド郡に定住し、

¹⁰ http://www.unhcr.or.jp/ref_unhcr/unhcr/act.html (2006 年 3 月 5 日)

経済的に成功し良く同化している。¹¹

これは UNHCR の文書庫に保存されているトルストイ財団からの報告に記載されていた一文である。このアメリカの副領事とは、迪化（現ウルムチ市）のアメリカ領事館の副領事マッキナンである。

キプリコン・チャーノフはアルタイ地区に居住していた旧教徒で、1947 年 10 月に「共産主義者」から逃れるべく、アルタイ地区を旅立った。¹²

当時、アルタイ地区では、それまで実効統治を行っていた東トルキスタン共和国軍と、そこから離反したカザフ族のウスマンの軍が戦闘を繰り広げていた。ウスマンの軍にはウルムチを直轄支配していた国民党から支援が行われていた。東トルキスタン共和国軍にはソビエト政府の支援があったとされる。

チャーノフたちは東トルキスタン共和国を共産主義者のものと認識し、逃亡を開始している。

彼らは戦闘と食料の調達に苦しみつつ放浪した。¹³

1949 年彼らはアメリカの迪化（現ウルムチ）の副領事マッキナン¹⁴と共に新疆とチベットの境まで到達した。彼らはチベット入りの許可を得ていたが、チベット政府側の守備隊に連絡が行き届いておらず、偶発的にマッキナンは射殺された。その後彼らはチベット入りし、9 ヶ月間ラオスに滞在した後チベットへ戻り¹⁵、1951 年にカルカッタでトルストイ財団に保護された。

チャーノフらのグループの移動経路は彼らだけの特異なものである。移住開始時期も 1947 年と早く、中国共産党の影響力が及ぶ以前に、東トルキスタン共和国を共産主義者とみなしていた時点で興味深い。また、1949 年以降はアメリカの外交官と移動しており、彼らが反共思想を持っていたことがうかがわれる。

まとめ

中国領アルタイ地区の古儀式派の移住史とそこでの生活の経緯について概観してきた。

18 世紀に現れた「石の民（каменщики）」と「ポーランドの民（поляки）」とよばれる古儀式派の一部は、19 世紀になると『白水郷』や自由な土地、様々な負担から逃れるべく中国領アルタイを目指し、一部は定住に成功した。

彼らの人口は 1000 人以上に達し、ロシア系住民の過半を占めていた。彼らは主に中国領アルタイ地区北部の僻地で自ら開墾した村落で居住していた。

彼らの生活は平穏ではなく、しばしば虐殺の対象にされ、彼ら自身が戦闘行為に動員されることもあった。

彼らの多くは 1947 年以降、西側諸国や、ソ連邦に出国していった。1960 年ごろには大多数が出国し、1980 年ごろまでには全員が出国したと思われる。

キプリコン・チャーノフに率いられた集団は中国共産党の影響力が及ぶ以前から移動を開始し、チベットとラオスを経てインドへ出国した。彼らの特異な移住経緯については今後さらに調査していきたい。

¹¹ UNHCR 11 Records of the Central Registry 4/47(2) Tolstoy Foundation INC. 1939-1968.

¹² Scott Moss's Essay: A History of the Tolstoy Foundation 1939-1989 http://www.tolstoyfoundation.org/pdfs/tf_history_s-moss_.pdf (2006 年 3 月 5 日)。

¹³ 同上。

¹⁴ Douglas Seymour Mackiernan, 1913-1949 彼の生涯は Ted Gup : The Book of Honor : Covert Lives and Classified Deaths at the CIA, Random House, 2001, に詳しい。ウルムチをたつ際、マッキナンはウスマンから物資の補給を受けている。CIA のエージェントとして様々な反共工作に関わっていたとされる。

¹⁵ Scott Moss's Essay: A History of the Tolstoy Foundation 1939-1989.

補足：国連難民高等弁務官事務所文書館の利用法

国連難民高等弁務官事務所文書館（Archives of the United Nations High Commissioner for Refugees）はスイス連邦ジュネーブ市の UNHCR 本部ビル内部に所在している。全ての調査者に公開されている。

UNHCR の世界各地の事務所が日常業務中に作成した手紙、FAX、電子メール、写真、音声録音、ビデオテープ、ポスターが収蔵されている。

フォンドの細目、利用方法等は UNHCR のホームページ¹⁶で公開されている。

一般の資料は作成から 20 年後、難民個人のケースファイル、難民登録申請書、難民個人の取り扱いに関わる資料は作成から 75 年後に開示される。2025 年以降現在開示されない資料の公開が期待される。

与えられた申込書にしたがって開示請求をすると、開示可能な資料が選別され、請求者に与えられる。そのなかから必要な部分について複写の請求をするという手順で複写を入手できる。

事前に電子メールで予約を入れる必要がある。利用時間は月曜から金曜の 9:00-17:00。コピー代（1 枚 0.33 米ドル）以外の費用は不要。対応は迅速で親切である。

参考文献

- ・中村喜和『聖なるロシアを求めて [増補版] 』平凡社、2003 年。
- ・中村喜和「ロシア人旧教徒の世界」、『スラブの文化』弘文堂、1996 年。
 - ・宮崎衣澄「シベリアの古儀式派」（中京大学社会科学研究所ロシア研究部会編、『東シベリアの歴史と文化』、成文堂） 2005 年。
- ・王柯著『東トルキスタン共和国研究』東京大学出版会、1995 年。
- ・毛利和子著『中国とソ連』岩波書店、1989 年。
- ・『阿勒泰風情』 詳細不明。
- ・鄧波著『俄羅斯族簡史』民族出版社（民族知識叢書）、烏魯木齊、1990 年。
- ・俄羅斯族簡史編写組『俄羅斯族簡史』新疆人民出版社、 烏魯木齊、1987 年。
- ・包爾漢『新疆五十年 包爾漢回憶錄』中共文史出版社、北京、1994 年。
- ・阿勒泰地区地方志編纂委員会編 2004 年『阿勒泰地区志』新疆人民出版社、烏魯木齊。
- ・哈巴河県地方志編纂委員会編 2004 年『哈巴河県志』新疆人民出版社、烏魯木齊。
- ・新疆維吾爾自治区民族事務委員会編 1995 年『新疆民族辞典』新疆人民出版社、烏魯木齊。
- ・L. Benson, I, Svanberg, 1989, “Russians in Xinjiang: From Immigrants to National Minority”, in: Central Asian Survey, vol8, Society for Central Asian Studies, Great Britain, pp. 97-129.
- ・Richard Morris, 1981, “Three Russian Groups in Oregon: A Comparison of Boundaries of a Pluralistic Environment”, Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Oregon.
- ・Ф. Ф. Болонев, Старообрядцы Алтая и Забайкалья: опыт сравнительной характеристики. Барнаул: Изд-во БЮИ, 2000

¹⁶ <http://www.unhcr.org/cgi-bin/texis/vtx/research?id=43e32a7a2> (2006 年 3 月 5 日)